
ダイブ

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ダイブ

【Nコード】
N3859P

【作者名】
山羊ノ宮

【あらすじ】
彼女と背と背を合わせて立っていた。
彼女と両の手をつないでいる、いつもの体勢だ。

彼女と背と背を合わせて立っていた。

彼女と両の手をつないでいる、いつもの体勢だ。

彼女の頭はちょうど俺の肩甲骨あたりに来ていて、ゆらゆらと彼女が頭を動かすと、時々変な所に当たって痛い。

彼女の頭が俺の背骨の辺りをずるずると這う。

おそらく上を見上げたのだろう。

「何か死にたい」

「は？またか？」

「だってさあ、生きてても苦しいだけだもん。辛いだけだもん」

「お前馬鹿か？」

「馬鹿でもいいもん。死んで楽になりたい」

「馬鹿決定な。死ぬこと自体、苦痛そのものだろう。楽になりたいのに、何で進んで苦しみに行くんだよ」

「そっか、楽に死ねたらいいのにな？」

「そうだな。老衰とかは楽そうだろう？」

「だから、だから生きてんの？」

「だからだとか言っくなよ。それでも結構頑張ってるんだぜ」

「うん。知ってる」

「大体さ。生きてりゃ少しはいい事あんだろうが、それで我慢しろよ」

「出来ないの知ってるくせに」

「高望みし過ぎなんだよ」

「何で、貴方がそんなこと言っかなあ。だって貴方は・・・」
「知ってる」

彼女は俺だ。

手を強く握り締めれば、彼女は光の粒になって消えてしまう。背にあった温もりは幻想に、光は拡散し、解けて広がる。

そして、染み込み、俺へと戻るのだ。

けだるさの中、俺は瞳を開ける。

背後にはもう彼女はいない。

目の前には現実が広がっていて、時は滝のように流れ、体が朽ちていくだけである。

「どうすればいいんだろうな」

そんな独り言を言った所で答えは返ってなど来ない。

あるのは我が身一つだけなのだから。

どう生きようとし、どう死んでいこうとするのか、それは自分の意志だ。

決めなくちゃいけない、自分で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3859p/>

ダイブ

2010年12月9日01時51分発行